



図1 70歳代前半男性の右頬に出現した黒色結節の症例

矢印が初診のきっかけとなった右頬の痂皮。右の写真がそのダーモスコピー像。黒褐色の無構造的な病変。上方に潰瘍形成をみる。

症例

70歳代前半の男性。4年前に右頬に黒色結節が出現した。近医で脂漏性角化症と診断され、液体窒素療法を行っていた。2年ほど前から拡大してきたため、当科を受診した。初診時、右頬に6mm大の黒褐色の痂皮の固着があり(図1 矢印)、脂漏性角化症に対する液体窒素後の痂皮形成と考え、さらに液体窒素療法を継続した。その後、一旦は色素沈着となり軽快したが、しばらくすると痂皮が再び付着してきた。

ここに注目!

解決のヒント

皮膚腫瘍の鑑別には、その色調、形状などが重要であるが、近年ではダーモスコピーが使用されるようになり、微細な色調の変化、構築の違いを観察することにより、臨床診断がより確実に行えるようになった。典型的なダーモスコピー像は熟知しておくべきだが、本症例のように、疾患に典型的な所見を呈するものばかりではないため、経過なども考慮して総合的に判断する必要がある。本症例では周囲に脂漏性角化症が散在していたこと、液体窒素後であったこと、本人

が時々痂皮を触っていたというエピソードがあったことから、当初は脂漏性角化症の液体窒素後で、患者本人が痂皮を剥いてしまうことにより痂皮形成をくり返していたと考えた。しかし触らないよう指導し経過をみても、痂皮の形成をくり返したことから悪性腫瘍を疑い切除した。典型的な所見を呈さない皮膚腫瘍や、軽快・増悪を長期にわたりくり返すなど、不可解な経過を示す皮膚腫瘍に関しては、悪性腫瘍を念頭に入れ、美容皮膚科的な治療を急がないことが重要である。